

教育長 様

校番 030 世羅 高等学校長  
( 全日制 課程)

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る  
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校  
令和4年度 実施報告書**

**1 学校の教育目標等**

(1) 教育目標

「TOP RUN 世羅」を掲げ、生徒の自主性・自律性を高めるとともに、あらゆる分野においてリーダーとなる生徒を育成する。

昨年度末に、各分掌で年度の評価を確認し、次年度に向けての課題を明らかにしていった。そこから今年度の行動計画・評価指標・目標値を定める中で、教育目標の確認を行った。その後、校務運営会議、職員会議を通じて全職員で共有化を図った。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

「なぜ?を考え抜く生徒、自己を律し、他を巻き込むことのできる生徒、世羅を思い、世羅の未来を創ろうとする生徒」が育てたい生徒像である。

世羅高校生に付けたい資質・能力は、教職員全体で世羅高校の課題を共有し、現状を分析した上で、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等の資質・能力の3つの柱を整理し、それぞれ「つなげる」、「説明する」、「批判する」、「協働する」、「学び続ける」のキーワードでまとめ、求める力を「活用力」、「論理的思考力」、「批判的思考力」、「コミュニケーション力」、「共同参画」、「社会的貢献」、「自己理解」、「他者理解」とした。そのうえで、学校全体の学年ごとの到達目標を言語化し、それを各教科・学科等に落とし込んでいる。年度末に、各教科の教科経営計画の整理と次年度の経営計画策定と並行して検討し、教科主任会議を通じて共有化を図っている。生徒・保護者には各教科のシラバスとともに内容を共有している。

(3) 学科等の特色

農業経営科は地域営農類型と六次産業類型の2類型を展開し、地域の主幹産業である農業を通じて、地域に貢献できる生徒を育成している。生活福祉科は、生活経営類型と福祉類型の2類型を展開し、幅広い「生活」に関する知識と技能を身に付け、豊かな生活と地域に貢献できる人材を育成している。普通科は、将来活用できる幅広い教養を身に付け、それぞれの進路に則した高い学力を醸成している。また、「総合的な探究の時間」を通じて、授業で学んだ内容を地域・社会の諸事情とつなげて考え、高い問題意識をもち、世羅町に対して具体的な街づくりの提言を行うことで、地域社会に貢献できる生徒を育成している。

**2 研究の概要**

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

農業経営科で培ってきた地域資源を生かした地域の課題解決に向けた専門性の高い課題研究について、作成している「世羅高生に付けたい資質・能力」への到達を測るルーブリックを作成し、生徒の学習状況を適切に評価するまた、そのルーブリックによる評価が学校のすべての教育活動に汎用的に活用されるよう工夫した。3学科併設の利点を生かし、3学科が協働できる教育課程の実現について検討し、進めた。

(2) 3年後の目指す学校の姿

専門学科が取り組んできた、地域資源を生かした地域の課題解決に向けた専門性の高い課題研究の成果と、普通科の広範な学習の成果を互いに享受し協働することで、世羅高校から地域への発信力を高めていく。また、

すべての生徒が、世羅を自らの探究フィールドとして活動することで、将来的に世羅を思い、世羅の未来を創ろうとする、地域社会のあらゆる分野においてリーダーとなれる生徒が育成される。

### (3) 令和4年度の目標

#### ア アウトプット（活動指標）

- ・学校として育成を目指す資質・能力に係るルーブリックを、教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し、生徒の学習状況を適切に評価することができている。
- ・農業経営科の「課題研究」の評価について、「世羅高生に付けたい資質・能力」を測るルーブリックを生活福祉科、普通科とも関連付けて作成し、生徒の学習状況を適切に評価することができている。
- ・学科を横断した教育課程が検討され、実施されている。

#### イ アウトカム（成果目標）

- ・授業評価アンケートの「授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた」が最高評価4の生徒の割合が、70%以上になっている。
- ・世羅高生に付けたい資質・能力の自己評価レベルが、学年末に上がった生徒の割合が50%以上になっている。また、卒業時にレベル3（3学年）と自己評価した生徒の割合が50%以上になっている。

### (4) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

#### ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

- ・農業経営科「課題研究」（普通科「総合的な探究の時間」）

#### イ カリキュラム開発の概要

（マクロレベル）学校全体の「育成を目指す資質・能力」の検証を行った。また、育成を目指す資質・能力を、いつまでに、どの程度育成するのかを明確化し、各教科で作成するもののスケールをそろえとともに、その共通理解を促すために、全教員の意見を反映させながらマスタールーブリックを作成した。

具体的には、4月にそれまでの「世羅高生に付けたい資質・能力」の到達度を生徒に自己評価させ、学年間の相関や、生徒への浸透度を測り、客観的に評価する取組を行った。

（ミクロレベル）育てたい生徒像を、「世羅を思い、世羅の未来を創ろうとする生徒」としている学校として、世羅を舞台として課題を発見し、それを解決する活動を主体的に行う授業によって、生徒の自主性・自律性を高め、リーダー性を育む取組を進めてきた農業経営科の「課題研究」を中心に、カリキュラム開発を行った。

育てたい生徒像を育成するためには、「課題研究」や「総合的な探究の時間」の授業だけで育まれるのではなく、教科それぞれにおいて科目間の繋がりを意識すること、また教科の横のつながりから深い学びとなるようにしていくことが大切である。今年度の「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の取組として行うこととなった、「核となるカリキュラムと教科とのつながりを考える」で、「総合的な探究の時間」と理科の授業を関係付ける工夫を取り入れた研究授業を実施した。

#### ウ 校内体制

カリキュラム開発を全教職員が参画して行うために、以前から校内に組織されていた教科主任会議を通じて、カリキュラム開発にかかわる教科からの意見のとりまとめや研修のまとめ・共有を行った。また、例年計画されている授業改善のための年回の校内授業研究のテーマに新しいカリキュラムにかかわる内容を加え、実施した。

### (5) 学習評価

定期考査で知識・技能を広く活用しながら解く「活用問題」を導入し、付けたい資質・能力の定着の状況をはかるようにしている。実施後、正答率、解答の傾向などから、各教科の取組の成果と課題を明確に整理することができた。

1学期末に行う第1回授業評価アンケートによる生徒の自己の学習状況及び授業への評価から、教科ごとに改善に取り組む課題を明らかにし、学習や指導の改善に取り組んだ。その結果を、第2回授業評価アンケートで検証し、次年度に向けての教科の課題と次年度の教科ごとの「世羅高生に付けたい資質・能力」の内容を見直す資料としている。

民間テストについては、次のとおり活用した。

受験前指導等：実施1か月前に保護者宛て案内を配付

受験内容・趣旨説明（受験準備ガイド活用）

受験後指導等：思考力トレーニングBOOK 理解編への取組（受験直後）

思考力トレーニングBOOK 活用編への取組（結果返却時から春休み課題）

全教職員研修：2月3日15:55～

GPS-Academic の意義や活用方法についてベネッセから講師を招き研修を行った。

また、本校の結果について全教職員で共有した。

今後の活用：学校（学年）の思考の強みと弱みを把握し、特に弱みであった批判的思考力を伸長するための指導を共有していく。

GPS-Academic による思考力と教科学力のバランスを活用し、注目すべき生徒について、世羅高校が各教科で付けたい資質・能力の育成状況を継続して確認する。（アンケート調査）

### (6) カリキュラム評価

（マクロレベル）年度始めに、学校評価において活用する指標として「この授業で、授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた生徒の割合」を加え、明確に「できた」とする生徒の割合を把握するために、肯定的評価の割合ではなく最高評価の割合を活用し、70%の達成を年度の12月までに達成することにした。

（ミクロレベル）育てたい生徒像を、「世羅を思い、世羅の未来を創ろうとする生徒」としている学校として、生徒の自主性・自律性を高め、リーダー性を育む取組を進め、その評価として世羅高生に付けたい資質・能力の自己評価レベルが、学年末に上がった生徒の割合が50%以上になっている。また、卒業時にレベル3（3学年）と自己評価した生徒の割合が50%以上になっていることとした。

## 3 令和4年度の成果及び課題

### (1) 成果

・授業評価アンケートの「授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた」が最高評価4の生徒の割合が、70%以上になっているについては、65.9%と、当初目標に到達することはできなかった。一方、肯定的な評価は、94.2%であった。

・世羅高生に付けたい資質・能力の自己評価レベルが、学年末に上がった生徒の割合が50%以上になっている。また、卒業時にレベル3（3学年）と自己評価した生徒の割合が50%以上になっているについては、項目が1つ以上上がった生徒は94.0%であった。また、3年生では卒業時にすべての項目でレベル3以上であると評価した生徒は69.2%であり、当初目標を上回った。

### ・「核となるカリキュラムと教科とのつながりを考える」

普通科では「総合的な探究の時間」を専門学科では「課題研究」を「核となるカリキュラム」として位置付けて取組を進めた。「総合的な探究の時間」の目標は、学校が目指す生徒の育成と連動し、専門学科における「課題研究」は、「総合的な探究の時間」を代替する科目である。このことを踏まえて、これらの育成を目指す資質・

世羅高等学校 令和4年度 マスタールーブリック

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
学びに向かう力 ・人間性等	将来を考えていくときに、自己を見つめ、理解することができる。	将来を考えていくときに、自己の課題を発見することができる。	将来を考えていくときに、自己の課題を発見して、解決の手立てを講じることができる。	将来を考えていくときに、課題解決のために講じた手立てを改善して、粘り強く取り組むことができる。
	他者と協働する活動の中で、解決すべき課題に対して、自己と他者の違いに気付くことができる。	他者と協働する活動の中で、解決すべき課題に対して、自己と他者の違いを受け入れることができる。	他者と協働する活動の中で、解決すべき課題に対して、自己と他者の違いを受け入れ、相手を尊重することができる。	他者と協働する活動の中で、解決すべき課題に対して、自己と他者の違いを受け入れ、相手を尊重し、諸問題の解決を図ることができる。
知識・技能	周囲の事象について思考するために、基礎的な知識・技能を身に付けることができる。	周囲の事象について思考するために、学んだ知識・技能を活用することができる。	周囲の事象について思考するために、学んだ知識・技能を活用し、相互につなげることができる。	周囲の事象について思考するために、学んだ知識・技能を他分野に応用することができる。
思考力 ・判断力 ・表現力等	物事を考察する際に、根拠となる事実を基に課題や問題を発見することができる。	物事を考察する際に、根拠となる事実を基に、課題や問題を発見し、解決策を考えることができる。	物事を考察する際に、根拠となる事実や情報を集め、その対比を踏まえて解決策を考えることができる。	物事を考察する際に、根拠となる事実や情報を複数集め、その対比を踏まえてよりよい解に向けて考えをまとめることができる。
	発見した課題や問題について、伝えることができる。	発見した課題や問題の解決策についてまとめ、伝えることができる。	解決策の実現に向けて計画を立て、具体的な行動をとることができる。	解決策の実現に向けて、改善を重ね、新たな行動をとることができる。

能力の評価においては「マスタールーブリック」を使用した。

以下に今年度実施した「世羅高生に付けたい資質・能力」のマスタールーブリックを示す。学校教育目標で示された育成を目指す生徒像と一致させ、全ての教育活動により育成を目指すものとする、抽象度が高く汎用的であるため、各教科の到達目標としてそのまま当てはまるのが困難である。

そこで、すべての教科で年度始めにそれぞれの教科版に落とし込んだルーブリックを作成し、シラバスと一緒に生徒に配付した。下記に示したのが理科の「世羅高生に付けたい資質・能力」のルーブリックである。これも理科の全ての科目、全ての内容を踏まえるため、抽象度が高く汎用的な表現となる。そこで、今年度は理科会を中心に、教科で育成すべき資質・能力と、本校で育成を目指す資質・能力のマスタールーブリックとの関係性に着目して評価に係る研究を進めることとした。

尺度 資質・能力	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
学びに向かう力・人間性等	自分の日常生活に対し、身に付けた科学的見方を用いて、他者の意見・考えに触れながら、改善方法を模索できる。	自分の地域の諸問題に対し、身に付けた科学的見方を用いて、他者の意見・考えを尊重しながら、解決方法を模索し、改善方法を提案できる。	人生や社会の問題に対し、身に付けた科学的見方を用いて、他者の意見・考えを尊重しながら、解決方法を模索し、社会貢献の道を提案できる。	人生や社会の問題に対し、身に付けた科学的見方を用いて、他者と協働して解決方法を模索し、社会に貢献できる。
知識・技能	自然の事物・現象に関わる基本的知識・技能を、他単元や他教科、自分の日常生活と結びつけて習得し、活用できる。	自然の事物・現象に関わる基本的知識・技能を、他単元や他教科、自分の地域の諸問題と相互に結びつけて習得し、活用できる。	自然の事物・現象に関わる基本的知識・技能を、他単元や他教科、社会の諸課題と相互に結びつけて習得し、活用できる。	学んだ自然の事物・現象に関わる基本的知識・技能を、社会的現象と自在に結びつけて、活用できる。
思考力・判断力・表現力等	観察・実験・日常の科学的現象から考察した内容を、自分の言葉で説明できる。 自分の日常生活や身の回りの情報と、科学的現象とを関連させて思考し、論拠を見つけることができる。	観察・実験・日常の科学的現象から考察した内容を、自分の言葉で論理的に説明できる。 自分の地域の諸問題や情報と、科学的現象とを関連させて思考し、根拠を示して主張できる。	観察・実験・日常の科学的現象から考察した内容を、他者の理解度に合わせて論理的に説明できる。 社会の諸課題や情報と、科学的現象とを関連させて思考し、議論できる。	社会的な諸問題や社会にあふれる情報を、科学的な根拠をもとに考察し、自分の考えや是非を、他者の理解度に合わせて論理的に説明できる。

最初に、マスタールーブリックと教科のルーブリックとを同じフレームとすることで、各教科で様々な内容を学習した後のゴールイメージとして示した生徒の姿であることを共通認識とした。一方で各教科では教科の目標があり、育成すべき資質・能力が定められている。「総合的な探究の時間」と各教科は繋がっているはずだが、各授業に落とし込んだとき、どのような授業をすればよいのか理科会で協議し、校内研修として全教職員で核となるカリキュラムと教科とのつながりを考えることとした。

今回の事例に関わる理科会では、県教育委員会の事業として合同授業研究会を実施するため、8月下旬に高校教育指導課の担当指導主事が来校されて、事前の打ち合わせとして事業説明をされた。それを受けて、担当の指導主事が参加しての理科会を計6回実施した。理科会は理科主任が主催し、担当の指導主事は主としてオブザーバーとしての参加だが、通常理科会の内容である定期考査の活用問題の検討、他校の取組の紹介など合同授業研究会に関わらない内容についても意見をいただいた。

### ・研究授業（化学基礎）

授業の工夫では、内容面で「化学基礎」と「総合的な探究の時間」との関連を見出すのは困難である。理科の内容のため、理科で育成すべき資質・能力を、「総合的な探究の時間」の目標に取り入れることはせず、理科の目標のままでないといけないことは、理科会で確認した。そのうえで、1年生の「総合的な探究の時間」の探究課題とのつながりを探ることとした。1年生の探究課題に「なぜ学ぶのか」という、汎用的で本質的な問いがある。「総合的な探究の時間」では、自分の生き方と関連付き、各教科では、教科の内容と関連付く問いである。この「なぜ学ぶのか」は、どの教科においても、どのような学習内容においても重要な問いである。

本年度の1年生については、すべての教科・科目で単元指導計画を作成してから授業に入ることとしている。加えて、パフォーマンス課題を実施する単元では、単元テンプレートも作成することとしており、単元「物質と化学反応式」をその対象として、単元テンプレートも作成した。この中には、重点目標として「本質的な問い」の欄があり、本単元では、「総合的な探究の時間」の「何のために学ぶのか」を意識して、「モル濃度をなぜ学ぶのか」という問いを考えた。この内容の目標は、これまで多くの場合「モル濃度が計算できるようになる」ことであった。いずれ、モル濃度の計算ができるようになることは必要だが、本時は計算をあえてさせないで、モル濃度を「なぜ学ぶのか」に焦点化した。ワークシートにも計算問題はない。合同授業研究会で実施する研究授業として、マスタールーブリック、教科のルーブリック、単元テンプレートを活用する中で、資質・能力の整理と問いの立て方を意識し、これまででない新しい授業を提案できた。このように、研究授業の方向性の検討の段階から理科会で協議しながら行うことで、いろいろなアイディアが詰め込まれた授業ができた。

また、本校では、振り返りの充実を図るため、各教科で様々な取組を行っている。化学基礎では、毎時間 Google Form により入力することとしており、その内容を観点別学習評価の評価資料として活用している。Google

Form に入力された振り返りシートの記述を印刷し、学習指導案で示された評価基準の妥当性の検討を行うため、理科会で、学習指導案に示された評価基準を用いて理科の教員4人で評価した。生徒名は印刷せずに、純粋に生徒の記述をABCで評価したが、生徒23人に対して教員4人の評価にずれがあったのは、3人であった。評価が異なった生徒の記述を見返して、改めて評価基準の各要素を確認して、4人で協議して、評価のずれも修正することができた。評価基準の文章表記に、例もあわせて載せておくことで、比較的スムーズに生徒の記述を評価できた。教科会で協働的に実施することで、評価基準として最低限必要な要素が何か、どのように記載すれば、よりスムーズに評価できるかなど、今後の指導と評価に役立つ話し合いができた。

また、教科主任会議で授業改善のPDCAサイクルが回るよう各教科会をコーディネートしている。教科主任会議では、毎日授業を行う先生方一人一人にPDCAサイクルを回してもらうために、具体的な各教科の取組の事例を共有した。今回の取組により、改めて教科会の重要性が認識できた。教科会を事務的な内容だけにとどめず、授業についての指導と評価について話し合う場として活用することが大切であると今回改めて感じた。

#### ・総合的な探究の時間の評価研修

来年度から実施される学科を横断した「総合的な探究の時間」の教育課程を検討し、評価について意識統一を図るため、令和4年度 SERA 探究Ⅱ（「総合的な探究の時間」）最終報告会を全教職員で評価を行う場として研修を行った。

普通科2年生が世羅町の課題とその解決策について研究した成果をまとめて発表した。教職員は各自評価項目に基づいて評価を行い、その結果をもとに研究協議を行った。

#### ・GPS-Academic 研修

民間テストを活用した評価方法GPS-Academicの活用について、県の指定を受け実施した。GPS-Academicは、社会で活躍するために必要な問題解決のための力を「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」の3つの観点から多角的に測定する。問題解決へ向かう姿勢・態度を通じて生徒の強みやタイプを可視化する。GPS-Academicの問題を作成し、結果分析しているベネッセから講師を招き、世羅高校で実施した2年分のデータから、本校生徒の傾向や強みを共有した。また、担任においては個別評価をどのように活用するか助言を受けた。

#### (2) 課題

授業評価アンケートの結果では学校全体で「この授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた」の最高評価である4の生徒の割合が70%となることを目標としたが、65.9%であった。昨年度に引き続き全体として目標の70%に届かなかったことを意識して、「課題研究」や「総合的な探究の時間」を核とした教育活動に学校全体で取り組み、それ以外の授業も、生徒たちの身近な事象への関連や影響をできるだけ意識できるような問いの設定や、単元テンプレートでの本質的な問いの設定、活用問題を工夫していく必要がある。

### 4 令和5年度の目標及び取組内容

#### (1) 令和5年度の目標

##### ア アウトプット（活動指標）

- ・マスタールーブリックを活用して、教員による評価及び生徒自身による自己評価が行われ、生徒の学習状況を評価と、教科で付けたい資質・能力のルーブリックとの整理がなされ、適切な場面で活用し、評価されている。
- ・民間テストで測った生徒の資質・能力と、教科で付けたい資質・能力に対しての到達状況の自己評価との相関関係について継続して分析する。また、民間テストを参考に、教科で付けたい資質・能力の内容やその到達度の判断材料となる作問の在り方について検討する。

##### イ アウトカム（成果目標）

- ・マスタールーブリックを活用したアンケートで、到達レベルが4月時点から学年末までに上がったと考える生徒の割合が70%以上となる。
- ・授業評価アンケートで、「この授業で学んだ内容を地域・社会の諸事象とつなげて考えることができた」の最高評価の生徒の割合が70%以上となる。
- ・世羅高生に付けたい資質・能力の自己評価レベルが、学年末に上がった生徒の割合が80%以上になっている。また、卒業時にレベル3（3学年）と自己評価した生徒の割合が60%以上になっている。

## (2) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

### ア カリキュラム開発の概要

- ・学科を横断した「総合的な探究の時間」の教育課程を実施し、評価方法についてさらに検討する。
- ・学科を横断した「総合的な探究の時間」において、より実践的な活動を行うため、地域連携を深め、生徒の活動が活発なるよう各教科で工夫することと、良い取組については全教職員で共有することを徹底する。

### イ 校内体制

- ・教科主任会議で報告、検討する内容を明示し、それを各教科会議において協議する。その協議した内容を次の教科主任会で報告する形式を継続する。また、各教科会から出された課題を研修の内容やテーマに活かし、「課題研究」や「総合的な探究の時間」を核としたカリキュラム開発を進める。